

段成式の寺塔記に就いて

春 日 禮 智

すべての學問に於いてその資料となる文獻の、基本的研究の必要なることは言ふ迄もないが、今支那佛教史の研究にあつては、大藏經を中心とする佛教家側に傳へられた資料と、一般佛教家側以外に傳へられた資料との間には、その内容性質取扱ひ方等、あらゆる意味に於いて

截然たる區別があるのである。然るに若しこのことを識らずして、單に佛教家側の資料のみに依つて記述を進めて行くとすれば、其は多くの場合自己陶醉に終つて、佛教の社會的活動や、政治文化經濟との接觸が殆んど没却されて了ふであらう。又一般佛教家側以外の記録で佛教のことを論議してゐたならば、屢内容の空虚な、皮相の論に終り、或は時には排佛的傾向に墮してははねばなら

ぬ結果となるであらう。この故に私は、支那佛教の研究に携る人は必ずこの兩面に注意して頂きたいと思ふのであるが、悲しい哉、此迄の多くはその一面に墮して、なかなか兩面を巧みに充分使ひこなした研究は、甚だ少なかつたやうに思ふのである。

此に就いては從來面倒臭いといふ怠慢心理が最も災してゐたやうであるが、又中には未だ文獻の整理が充分できてゐないために、識らず知らずの間に大きな誤謬に陥つてゐることもあるのである。前者の恕すべからざることは言ふ迄もないが、後者の誤もその結果から言つたならば同一に歸するのであるから、我々はこの點最も警戒しなければならぬ。そしてその誤謬が発見された場合には、正直にそれを發表して學界の進歩を助けることも

學者の責務と信ずるものである。

大正藏經五一卷に收められてゐる段成式の寺塔記が完備してゐないことは、一讀して判ることであるが、その原本が如何なるものであつたかといふことに就いては、未だ何人も注意してゐないやうである。此に就いては脚註に原本を上野圖書館所藏本とはつきり斷つてゐるから、尙更疑問を起し難かつたのではなからうかと推察せられるのである。然るにその上野圖書館所藏本とは、實は同圖書館所藏に係る重較說郛本の寺塔記であり、其は大正藏經の編輯者が此は實に珍しい貴重な資料だといふので入藏したことが、後で調査の結果解つた。大正藏經の編者がどうしてかういふ誤りを犯したのであらうかといふに、此は勿論この本を不完全なものと知つて故意に入藏したのではないことはつきり解つてゐる。従つて此が編人は漢籍に知識の暗いため、充分その調査をなし得なかつたか或はその調査の手續きを全然忘れて了つたかといふことに歸着する。何れにせよ、かゝる大きな誤謬が、然も大正藏經の如き權威あるテキストに於いて

犯され、然もそれが未だに注意せられずに居るとすれば、其は學界としても大きな問題ではなからうかと信ずるのである。

二

然らば重較說郛の寺塔記とは如何なる性質の本であり、如何なる系統のものであらうか。又其には脱落がないであらうかといふことが問題となつて来る。此に就いては重較說郛本が便利な本であるが、善本でないことは少しく漢籍に素養ある人は誰でも知つてゐることである。私はかねてから支那佛教史研究の藏外資料の蒐集整理に著手してゐるのであるが、最近酉陽雜俎を手にして、圖らずもその續集中に寺塔記二卷のあることに氣が附いた。大正藏經本の寺塔記は一卷であるが段成式の撰であり、酉陽雜俎も段成式の撰なることは言ふ迄もない。そこで兩者を突き合はせて見ると其は完全に同一のものであつて、然も大正藏經本は量から言つて殆んど半分以上も減じてゐることが解つた。そこでかねてから大正藏經本の寺塔記の性質に疑問を持つてゐた私は、一體

大正藏經の使つた原本は何であるか、又寺塔記並に酉陽雜俎は書誌學的に見て如何なるテキストが残つてゐるかを研究してみる必要を感じ、色々調査してみると、大正藏經の寺塔記とは明の陶宗儀の輯めた重較說郛の寺塔記一卷と全同であることに氣が附いたのである。然るに重較說郛に收められてゐる輯佚書の性質であるが、此には色々な本に引用されてゐる佚文を蒐集整理して一書をなしたのもあれば、又始めからある完全なテキストから勝手に抄出して編入した本もあるのである。寺塔記の場合には全然佚文を蒐集した形跡が認められず、其は他の完全なテキストからの抄出であることが、本文を検討して推察せられるのである。茲に於いて重較說郛の寺塔記が、實は酉陽雜俎のその抄文であることはよく判つたが、最後に残つた問題は、その說郛本と同種類の大正藏經の使つた上野圖書館本とは如何なるものであるかといふことがはつきりしないので、曩日私は末弟の應召の際上京して上野圖書館を訪問し、寺塔記を拜見したいと申し込んだ。然るに不思議なことに、係員の言ふには同圖書館

段成式の寺塔記に就いて

には寺塔記はないとのことであつた。又實際具へ附けのカードにも見えなかつた。私の考へでは立派な寫本か、少くとも刊本位はあると思つてゐたのが期待が外れてがっかりした。そこで更に酉陽雜俎の有無を尋ねたら、此もないとのことであつた。最後に重較說郛本を求めた所、說郛と言つて持つて來た重較說郛の中には言ふ迄もなく寺塔記が編入されてゐる。茲に於いて大正藏經に斷つてある上野圖書館所藏の寺塔記とは、實は重較說郛の寺塔記であることが略判明した。そして圖書館の館員もそれに違ひないとのことであつた。その後私は大藏出版株式會社の方へその調査を依頼したら、當時の係りの人がゐないからはずきり判らぬが、多分さうでせうといふ返事であつた。

以上は大正藏經本の寺塔記の出所を明らかにし、その性質を究めんとした私の手續きであるが、若し私の手續きにして誤りが無いとしたならば、此で大正藏經の寺塔記が、重較說郛のそれであるといふことは確定したわけである。それではその重較說郛本とは如何なるものであ

るかと言へば、此には澤山の省略があり、且つその引用に際しても少なからぬ不手際を暴露してゐるが、此等がこの本の杜撰な點である。大正藏經の編者がそれを知らずに、西陽雜俎を編入しなかつたことは、返すがへす残念なことである。

三

次に少しく西陽雜俎の寺塔記と、重較說郭の寺塔記に就いて比較してみよう。西陽雜俎は此が前集二十卷と續集十卷とに分れ、寺塔記はその中續集の卷五と卷六とに收められてゐる。従つてその問題も「唐段少卿西陽雜俎續集卷之五 寺塔上」と言つた具合で、初めから重較說郭本のやうに「寺塔記」として單行されたものではない。此に就いては西陽雜俎の成立とその性格を述べる必要があるが、其は後に述べるとして、こゝでは唯だその體裁の相違あることを銘記するに止めておく。

先づ寺塔記の構成から述べれば、その卷頭の序に唐の武宗の會昌三年(八四三AD.)著者段成式が張善繼、鄭夢復等と大興善寺に遊び、兩京新記及び遊目記の遺略を補録

せんとして果さず、會昌法難を経て宣宗の大中七年(八五三AD.)、故簡中、その時既に亡くなつてゐた二人の友と寺に遊んだ古記を拾ひ出して、涙を拭ひつゝ、書き記したのが此の寺塔記兩卷であるを述べてゐる。ことは西陽雜俎本も說郭本も同様である。従つて寺塔記が一卷でなく、兩卷即ち二卷であるべきことはこの序に依つて明瞭で、然もその二卷も序によれば段成式は會昌三年から大中七年に至る十年間に十に五六を亡つたとあるから、もとの草稿は二卷本より遙かに多い分量のあることが知られるわけである。

次にその内容であるが、西陽雜俎本は上卷に靖恭坊大興善寺、長樂坊安國寺、常樂坊趙景公寺、大同坊雲花寺、道政坊寶應寺、安昌坊立法寺、平康坊菩薩寺等が收めてあるが、此の中雲花寺、立法寺の記事は說郭本には殆んど缺けてゐる。又下卷では宣陽坊奉慈寺、光宅坊光宅寺、翊善坊保壽寺、宣陽坊靜域寺、崇義坊招福寺、招興國坊崇濟寺、永安坊永壽寺、崇仁坊資聖寺、楚國寺、慈恩寺等があるが、その中奉慈寺、保壽寺、招福寺、永壽寺、楚

國寺の記事は全然見えてゐないのである。加之、説郭本上巻の大興善寺條の髮塔の記事下最初に三九字を缺き、次に東廊の南素和尚院條下では「不可院」以下一七二字を缺き、安國寺條下では「尙有典刑」以下二〇八字といふ殆んど大部分を缺き、寶應寺條下では「有王家舊鐵石」等の五七字無く、立法寺條下では最初の百三九字を缺いて西北角院内云々の句があるから、此が寶應寺の條と混同し易く、更に「曼殊院東廊」等の五三字を缺き、殆んど全滅に等しい。次の菩薩寺條下では、題目下の書き出しが既に三六字を缺き、更に「故興元鄭公尙書」等の一五〇字が全然抜けてゐる。又下巻では、光宅寺は題目下一八七字なく、又「如斷古標」と「西壘逼之」の間一五字を缺いて殆んど記事の用をなさない。靜域寺の條では「禪門内外」等の五三字を缺いて次に僅かに「上蟠蛇汗烟懼」等の一七字を挿入して又二二五字缺。資聖寺條下では「中門惣間」等の一四〇字を缺き、慈恩寺條下も「初三藏」等の一七〇字なく、次いで「寺中柿樹」等の一四字を挿入して復び六一字を缺く。以上の缺字だけでも寺塔記の如き短篇では素

段成式の寺塔記に就いて

派らしい遺漏であるが、此の外各記事の末に附された連句、絶句、語、徵等は完全に抜けてゐるので、此等の量も少くなく、結局説郭の寺塔記は、酉陽雜俎の寺塔記の量の半分にも及ばないことになるのである。

更に次に説郭本の寺塔記の引文の不手際を示せば、大興善寺東廊の素和尚院の話は、話半ばにして打切りとなつてゐるし、安國寺東禪院條下では「尙有典刑禪師法空影堂」以下が、「尙有典刑」で切れてゐるので、意味が皆目解らないことになつてゐる。又寶應寺と立法寺の間に、立法寺の題目がないため、立法寺の記事が寶應寺の記事と混同される。又下巻の靜域寺の條でも、「上蟠蛇」以下の文は「野叉部落鬼首」に著かねばならぬ記事であるが、その前に脱文があるため「三階門外神變皇帝射弘雀處」に附くこととなつてゐる。此等の引文を見れば、説郭の引文の引き方が如何に拙劣であるかと、よく理解できると思ふものである。

少しく細かになり過ぎるかも知れないが、字句の異同に關しても説郭は可成り手を加へてゐる。この點、實は現

行の酉陽雜俎本も餘り信用が置けないのであるが、私のこゝで言つてゐるのは現在我々の手にし得るものの中、最も誤りの少い四部叢刊子部所收の三十卷本に就いて論じてゐるのである。此の本は湖北先生澆晉子部所收本と同一で、それは明の李雲鶴刊本である。酉陽雜俎の校異に就いては、涉閏梓舊第三十六冊に詳しく校勘してあるが、其は前集のみで、續集の方が無いから、今の場合役に立たない。さて說郛本の手を加へた部分を四部叢刊の酉陽雜俎本と比較して見ると、說郛の方が直してよくなつてゐる所も多少ある。併し訂正して悪くなつてゐる所も少くないから困る。此の點大正藏經本は今一つ悪くなつてゐる。此等に就いても詳細に一々實例を擧げて説明したいのであるが、今は紙數の都合上到底許されないことと思はれるから、他日テキストの刊行ができた場合、此が證據を擧げて一々それを指摘して見たいと思ふ次第である。

四

上來重較說郛の寺塔記の性質に就いて述べて來たので

あるが、此に依つて寺塔記を入藏せしめるならば、重較說郛本に依るべきでなく、酉陽雜俎本に依るべきことが明らかとなつたであらう。然らばその酉陽雜俎とは如何なる性質の本であるか、又その中に編入されてゐる寺塔記とは如何なるものであらうか、此の點が當然明らかにせらるべきことと考へられる。依つて以下此が解説を試みて見たいと思ふものである。

酉陽雜俎の著者は唐の太常少卿段成式である。彼の生存してゐた正確な年代は解らないが、文宗・武宗・宣宗・懿宗の朝にかけて生きてゐたことは明らかである。彼は太宗の朝褒國公鎮軍大將軍であつた段志玄三世の孫、宰相段文昌の子である。文昌は名門の出にも拘はらず、少時極貧の家に育ち、曾口寺の齋鐘を聞いては食を請ひに行つた所、ある日寺僧が齋がすんでから鐘を鳴らしたので、遂に食にありつけなかつたといふ位である。彼が苦學力行して菡雨に鎮した際、彼自身の歌つた詩に、「曾過闍梨飯後鐘」の句がある。然るに彼は遂に穆宗の朝宰相となり、晩年富貴を極めて金蓮花の盆で足を濯いだといふ。

段成式が任官できたのも、彼が素派らしい藏書家となり得たのも皆父の蔭である。段氏の崇佛は文昌に於いて既に見られ、舊唐書卷一六七のその傳に

大和四年、移鎮_三荊南。文昌於_三荊蜀、皆有_三先祖故第。至_レ是贖爲_三浮屠祠。

と記してゐる。此は成式にあつては、

解_レ印寓_三襄陽、以閑放自適。家多_三書史。用以自娛。尤深_三於佛書。

となつてゐる。文昌が特に歌舞音楽を好み、佛教を強信した性格は成式に於いても繼承され、成式にあつては武は父に及ばなかつたが、文は之を凌ぐものがあつた。成式も亦苦學力行の人として知られ、その博覽強記と奇篇秘籍の山積とは、よく後世に酉陽雜俎のやうな比類なき隨筆集を書き上げさせたのである。

段成式は晩年官を辭して襄陽に寓居し、讀書三昧に耽りつゝ悠々自適した。この頃交つた友に、溫庭筠、崔岐、余知古、韋蟻、徐商等があり、漢上題襟集十卷を遺したといはれてゐる。此の外彼の著作には酉陽雜俎三十卷廬

段成式の寺塔記に就いて

陵宮下記二卷の名が新唐書五九藝文志四九に載せてある。漢上題襟集は段成式が溫庭筠、余知古等と合作したもので、新唐書六〇藝文志五〇には十卷となつてゐるが、文獻通考二四八經籍七五の條には三卷に減つてゐる。然して湖北通志九一藝文一五外篇の條に十卷本と三卷本の二本あつたやうに記してゐるのは採らざる所である。酉陽雜俎に就いては後に述べることとし、廬陵宮下記は、段成式が吉州即ち唐の吉州廬陵縣に刺史として赴任してゐた時の記録であつて、今その抄本一卷が重較說郭局第十七に載つてゐる。又金石萃編一〇八の寂照和上碑は段成式が大和七年(八三三AD.)十二月著作郎たりし時撰したもので、成式の撰として最も信用してよいものである。寂照和上とは同年冬七十七歳で卒した安國寺の高僧で、法華維摩涅槃四分俱全起信等の大小三藏に通じ、門下に神晏、智文、契玄、實相等を出した。金石萃編には墨林快事の文を引いて、

唐季惟裴休成式、以_レ通_三釋典_三稱。裴事_三莊嚴流行_一。猶爲_三外事_一。則悟_三佛心印_一者、段一人而已。

と激稱してゐる。以て段成式が單なる佛敎學者でなく悟道の域に達した人なることが知られる。宋高僧傳一二の唐杭州大慈山寰中傳に依れば、寰中は百丈懷海門下の逸足で、咸通三年(八六二AD.)二月十五日、八十三歳で卒したのであるが、この時縉雲太守であつた段成式が性空大師寰中の眞蹟を書いたことが記され、彼が懿宗の朝まで生きてゐたことが知られる。

右の外、段成式の撰と傳へられるものに

劍俠傳一卷 龍威秘書四集晉唐小說暢歡第二所收

梁雜儀注一卷 重較說郛局第五一所收

婚雜儀一卷 同上

異疾志一卷 遜敬堂叢書、五朝小說唐人百家小說瑣記

家所收

感築格一卷 重較說郛局第一〇〇所收

等があるも、眞偽不明で、その傳來の経路も詳かでない。又宋中二〇六文文志一五九には彼の撰として錦里新開五卷が擧げられてゐるが、今は現存しない。なほ唐文粹、全唐文、全唐詩にも彼の詩文が夥しくあるから心あ

る人は参照せられたい。

さて段成式の各著西陽雜俎であるが、本書は人も知る如く段成式がその廣汎な知識と見聞を傾けて唐及び其以前の秘れたる史實、傳説、逸話、風俗、言語、その他あらゆる事柄を尅念に記述した隨筆であつて、中には事實として遽かに採用し難い話も譯山あるが、何分その巧みな叙述と隠れたる史實、逸文とは、本書をして頗るその價値を高からしむるものがあつた。今試みに本書の批評を紹介して見るに、宋の晁公式の郡齋讀書志一五小説類の條に、

右唐段成式撰、自序云、縫掖之徒、及怪及戲、無_レ侵_二於儒詩書_一。爲_二太羹史_一、爲_二折俎子_一、爲_二醢醢_一也。

大小二酉、多藏_二奇書_一。故名_レ篇曰_二西陽雜俎_一。分三十門、爲_二二十卷_一。其後續_二十卷_一。

とあり、始め二十卷ができ、次いで十卷が追加せられたことが述べてある。續集が成式の存命中に編纂されたであらうことはその體裁からよく解る。大小二酉山に奇書を藏するとは、唐の李吉甫の元和郡縣志三〇、太平御

覽四九所引の盛宏之の荊州記以來の説で、古來小西山に書千卷を藏したといふ傳説を採つて成式がその書の題目の名としたといふことを意味する。又同じく宋の陳振孫の直齋錄解題一一には

所レ記故多譎怪。其標目亦奇怪。如天咫玉格壺史貝編夢之類。

とあり、此はその内容を紹介したものである。この二志の記述は各々その一邊を説いてゐるが、我々は此に依つて酉陽雜俎の何たるかを略知することができる。そして古來の批評も多く二志の記述を出ない。然して四庫全書總目一四二子部小説家類三に至つては、本書の價値を述べて

其書多詭怪不輕之談、荒泐無稽之物。而遺文秘籍、亦往往錯出其中。故論者雖病其浮誇、而不能不相徵引。自唐以來、推爲小説之翹楚、莫或廢也。とあり、その價値を最上級のものとして決定的ならしめてゐる。まことに枕草子を讀むものは清少納言の高い教養に胸撃たるゝ感あるも、酉陽雜俎を讀むものは、段

段成式の寺塔記に就いて

成式の教養の豊かなのに驚嘆するであらう。

次に酉陽雜俎の成立に就いて、四庫全書總目一四二子部五二小説家類三の條、宋の胡應麟の筆叢を引いて、次の如き注目すべき説を擧げてゐる。

酉陽雜俎、世有二本。皆二十卷。無所謂續者。近於太平廣記中、鈔出續記、不及二十卷。而前集漏缺者甚多。悉鈔入續記中、爲二十卷、俟好事者刻之。又似乎其書已佚。應麟復爲鈔合者。然不知、應麟何以得其篇。

此に依れば、四庫全書の著者も胡應麟の説に賛同してゐるのではないが、胡應麟の説は珍説ばかりである。第一酉陽雜俎に二本あり、共に二十卷であつたといふが、其は何を指すのか解らないし、太平廣記から抄出した文と、前集に漏輯したものとを合せて十卷としたのが續十卷であると言つてゐるが、此亦極めて了解し難い所である。況んや新唐書藝文志に三十卷あると言つてゐる所を見れば、どうしても續集十卷が加はらなければ三十卷にならぬ筈であるから、續集がなかつたとする説は當らな

い。恐らく酉陽雜俎は前集二十卷が先に成立し、其の後に之を補ふ意味で續集が編纂されたが、寺塔記、金剛經鳩異の如きもこの時編入せられたものであらう。

酉陽雜俎の構成に關しては一貫したセフリーを發見することができない。それは矢張り一種の隨筆集とか叢書の類で、段成式の所謂雜俎である。このことはその目錄を見れば一見して理解できることである。先づその中前集は此を三十門に分ち、

- (1) 忠志、(2) 禮異、(3) 天咫、(4) 玉格、(5) 壺史、(6) 貝編、
- (7) 境異、(8) 喜兆、(9) 禍兆、(10) 物革、(11) 詭習、(12) 恠術、
- (13) 藝絶、(14) 器奇、(15) 樂、(16) 酒食、(17) 醫、(18) 黠、
- (19) 雷、(20) 夢、(21) 事感、(22) 盜俠、(23) 物異、(24) 廣知、
- (25) 語資、(26) 冥跡、(27) 尸笮、(28) 諾臯記、(29) 廣動植、(30) 肉

攪部

が此である。右の中、諾臯記は上下二卷に分れ、その抄本は重較說郛、五朝小説、龍威秘書中に一卷として收載されてゐる。又廣動植は四卷あり、更に細分して羽篇、毛篇、鱗介篇、蟲篇、木篇、草篇の六篇になつて記載さ

れてゐる。肉攪部も重較說郛、五朝小説、重編百川學海に一卷本が編入されてゐる。次に續集六門の内容は、

- (1) 支諾臯、(2) 貶誤、(3) 寺塔記、(4) 金剛經鳩異、(5) 支動
- (6) 支植

でこの中支諾臯、寺塔記、支植は共に二卷となつてゐる。又寺塔記は重較說郛に、金剛經鳩異は重較說郛、五朝小説中に一卷の抄本として收められてゐる。以上に依つて明かなる如く、酉陽雜俎はその内容が頗る豊富であり、且つ卷數も多いので諾臯記とか、肉攪部、寺塔記、金剛經鳩異の如き比較的量も多く、獨立性ある部門が獨立して色々な輯佚書や叢書の中に編入せられたものである。従つて寺塔記の場合でも、酉陽雜俎から獨立した寺塔記の一本があつて、其が重較說郛に編入されたと考へることは無理である。此の點寺塔記の内容から言へば、寺塔記の文が酉陽雜俎本に依るべきは論を俟たない所であるが、書誌學的に見ても大正藏經は矢張り酉陽雜俎本を採用すべきであつたと信するのである。

然るに現行の寺塔記の酉陽雜俎本がテキストとして完全かと言へば、其はもとより直ちに丸呑みにできないことは勿論である。茲に於いて重較說郭本も字句の異同を考勘するには多少の参考になり得るし、又宋の計有功の唐詩記事五七・段成式條に引く寺塔記二卷からの抜萃文も有力な参考となり得る。唐詩記事の文はその古さから言つても、又その量から言つても、重較說郭よりは非常に重要性を帯びてゐる。然るに酉陽雜俎そのものに就いても、現存してゐるものは非常に多く、今その中重要なものを擧ぐれば、

- 一、湖北先生遺書子部所收本三〇卷
- 二、四部叢刊子部所收本三〇卷
- 三、津逮秘書第九集所收本三〇卷
- 四、原本說郭卷第三十六所收本三〇卷
- 五、學津討原第十六集所收本三〇卷
- 六、崇文書局彙刻所收本三〇卷
- 七、續稗海第一套所收本二〇卷
- 八、龍威秘書四集晉唐山說暢覽第一冊師收本二卷

段成式の寺塔記に就いて

等があつて、同一とは言ひ難い。此の外博古存什、說庫、藝苑摛華、唐人說薈等にも收められてゐるとのことであるが、惜しいことには見る事ができなかった。併し上述の八種を見れば、その重要なものは包含着してゐると思ふし、酉陽雜俎の流傳の跡も略理解できると思ふから、此に依つて論を進めて行きたいと思ふ。右の中、續稗海、龍威秘書は續集を缺いてゐるから、今の場合は論ずる必要がない。

續稗海、龍威秘書を除く六種の酉陽雜俎本中、原本說郭が信用できないことは言ふ迄もない。残りの五種中、崇文書局本は津逮秘書本から來てゐる。又學津討原本は津逮秘書本並に元刊本を見てゐる。こゝで學津討原の編者張海鵬が元の刊本を見たといふことは、四庫簡明目録標注卷一四の説であるが、此は極めて重要な記事で、現在酉陽雜俎の刊本の最も古いものの一が學津討原本の中に流れ込んでゐることを意味する。更に湖北先生遺書本は民國十二年沔陽盧氏慎始基齋景印本であり、四部叢刊本が民國十八年上海商務印書館重印本なることは言ふ

迄もないが、此の二本は突き合せて見れば一目して判るやうに、同一版本を流用したもので、一本と見てよく、共にその最初に明の萬曆三十六年戊申（一六〇八AD）歳、李雲鶴の校勘した刻西陽雜俎序が附してあり、明刊李の景印本である。然るに今の李雲鶴の明刊本と津逮秘書本とを比較したならば津逮秘書本は明の崇禎（一六二八—四四AD）中虞山毛氏汲古閣刊本で、李雲鶴の刊本の方が古いことが解る。こゝに於いて李雲鶴の刊本は、現存西陽雜俎の刊本中最も古いものであることが解つたが、それにして津逮秘書本にも捨て難いものがあり、學津討原本も元刊本を取り込んでゐる點で重要な参考となり得ることが明らかになつた。

然るに西陽雜俎本の源流は、記録の上では更に南宋迄溯り得る。湖北先生遺書本にはないが、同一種類の四部叢刊本では、李雲鶴の序の外三つの序が附されてゐる。第一は明の刑部郎中たりし趙琦美（字元度、號清常道人）の序であり、此に依れば、彼は文獻通考に依つて西陽雜俎に前集、續集の二つがあることを知つてゐたが、未だ

續集なるものを見なかつた。或る日、彼は吳中の店で之を發見したが惜しいことにはそれは餘り善本でなかつた。其の後彼の父方の従兄に可菴といふ者があつて、前集の校本を持つてゐたので、何處から其を得たかと尋ねたら、可菴の曰く「自分の妻の父繆含齋可貞氏は平生から珍本漁りが好きで、曾て崑山の俞質夫といふ先生が持つてゐた宋刻の西陽雜俎を轉寫したものを、自分が更に録した」とのことであつた。こゝに於いて琦美は其の本を借りて歸り、自分の所持本と比較した所、その誤が皆訂正でき、脱文の補遺も少くなかつた。又彼は太平廣記等の類書及び雜説に引く引文を参考として之を補つたばかりでなく、嘉禾の項羣玉からも數條の資料の提供を得てこの書が出来上つたと言つてゐる。従つて本書が決して段成式の撰したまゝでなく、散佚の末編輯せられたことが知られる。第二は南崇の淳祐十載（一二五〇AD）の序で、その撰者は不明であるが、撰者は嘗て閩中を過ぎ西陽雜俎を見たいと思つてゐたが、容易にその機會のないことを深く遺憾としてゐた。偶々彼は淳祐九年の夏之

を發見したが、其は字畫漫漶して讀むに堪えないものであつた。そこで彼は之を舊籍と考勘して再刊するのだと言ふのである。此の序は學津討原にも引かれてゐる。第三の嘉定十六年癸未（一二二三AD.）六月、武陽鄧復應の酉陽雜俎序は、先に陳江の刊本なるものがあつて、それは前集しかなかつたのであるが、鄧復應は自分の家藏を以て續集十卷を以て追加したことを記したもので、此亦學津討原に引くところのものである。以上の三序は共に四部叢刊本に引く所であり、然もその中南宋の二序は共に學津討原にも載せてあり、李雲鵠の明刊本は必ずや學津討原の編者張海鵬も見えてゐたであらうことが想像できる。尙ほ此の外學津討原に依れば、南宋寧宗の嘉定七年（一二二四AD.）十月の紀年ある周登の酉陽雜俎後序を引いてゐる。此に依れば周登は酉陽雜俎の名は知つてゐるたがその書のあることを知らなかつた。偶々郡博士管容成なる者が此を得て彼に示したので、之を刻して容對に備へるものであると記してゐるが、此に依つて我々の現在知り得る最古の酉陽雜俎の刊本は、陳江の刊本なるもの

段成式の寺塔記に就いて

年代が不明であるから、南宋の嘉定七年まで溯りうるといふことになるのである。

六

上來述べ來つた所を綜合して考へられることは、寺塔記の定本は必ず酉陽雜俎本に求むべきこと、そしてその酉陽雜俎本は現在の所明の萬曆三十六年の李雲鵠の刊本を底本とし、之に津速秘書本と學津討原本とが参照せらるべきことが明らかにされたわけである。こゝに於いて津速秘書本の系統がもつと明瞭にされてくればと思ふのであるが、今の所それは致し方がない。尙ほ寺塔記の内容に就いても解説したいのであるが、餘り長くなるから、其は他日の機會に譲りたいと思ふ。^⑩こゝでは主として書誌學的に寺塔記と酉陽雜俎との紹介を試み、學者の御示教を仰ぐ次第である。

註① 舊唐書一六七・列傳一一七、新唐書八九・列傳一四、

唐語林二、唐詩紀事五七、全唐詩九函八五冊、全唐文

七八七、弘簡錄二三段文昌條、金石萃編一〇八、香祖

筆記八、山東通志一六三、青州府志四〇段志玄條、江西

通志八唐懿宗朝條、湖北通志一七〇流寓條、乾隆襄陽

- 府志二八寓賢條、光緒重修襄陽府志八等を見よ。その文學的地位に就いては、冊府元龜七一八李商隱條下に「詞與_二太原_一溫庭筠、南郡段成式_一齊_レ名。時號_二三才_一」_二とある。溫庭筠の女は段成式の子安節に嫁してゐる。安節は樂府雜錄一卷の作者で、成式の孫公路には北戸雜錄三卷の撰がある。
- ② 舊唐書六八、列傳一八、新唐書八九、列傳一四に傳あり。
- ③ 文昌の傳に就いては舊唐書一六七・列傳一一七、新唐書八九、列傳一四の外、唐語林六、唐詩紀事五〇參照。文獻通考二四八、乾隆襄陽府志三一書目の條、湖北通志九一藝外一五外篇を見よ。
- ④ 文獻通考二一五、直齋書錄解題一一、山東通志一四〇小説部、元和郡縣志二八、乾隆襄陽府志三一書目の條參照。
- ⑤ 金石萃編一〇八、金石補正七二、金石文鈔八、全唐文七七七、張氏吉金貞石錄一。尙ほ關中漢唐金石跋、關中金石文字存逸考六參照。
- ⑥ 唐李吉甫の元和郡縣志三〇に「大西山有_レ洞。名_二大西洞_一。小西山在_二西溪口_一。山下有_二石穴_一。中有_二書千卷_一。舊云、秦人避_レ地、隱學_二於此_一。自_二西溪_一北行十餘里與_二大西山_一相連。故曰_二西_一」。按_二二山皆在_二今湖南武陵縣西北_一といひ、太平御覽四九に、盛宏之の荊州記(麓山精舍叢書本卷二・一五a)を引き、「小西山上石穴中、有_二書千卷_一。相傳、秦人於_レ此而學。因留_レ之。故梁湘東王云_レ訪_二西陽之逸_一、是也」と述べてゐる。讀史方輿紀要八一湖廣辰州府條、方輿考證六三湖南辰州府條、湖南通志二四山川條之を繼ぎ、四庫全書總目一四二子部小説家類三の條亦同じ。
- ⑦ 文獻通考二一五、四庫全書總目一四二小説家類三の條、四庫全書提要七六小説家類三の條、山東通志一四〇小説部。
- ⑧ 四庫簡明目録標注一四・四〇bに「張目有_二元刊本二十卷_一。無_レ續」と記す。
- ⑨ 尙ほ唐文粹補遺一八に寺塔記の序文のみを記す。
- ⑩